

# 編集後記

▼当研究所が「家族」を主題として正面から取り上げたのは五年前、国際家族年の翌年でした。第四二号の後半部分がその内容です。

▼今回の特集の編集には難渋しました。誰もが生活の根拠地としての家族を持っていて、それぞれに歴史があり、それへの思いは千差万別です。その思いにつながる家族論とはなにかに悩みました。編集部はまず「家族」に関する学習からはじめました。それをまとめたものが所員の論議をへてかきあげた巻頭の論文です。

▼政府は国民の生存権を保障することに第一の責任を負っています。本田論文は文部省が説く「中教審答申「心の教育」が「家族」の生活の土台に目を向けていない点をきびしく批判しています。そこを抜きにした「家庭の教育力低下」への批判は、それこそ心構えさえしっかりしていれば、すべてよくなるという森首相的教育改革になるからです。

▼植木論文はスウェーデン政府が「家族」にどんなに手厚い援助の手をさしのべているか

を教えてください。論文の後半の保育サービスのところでのコミュニケーション（自治体）と住民の「家族育ち合い支援」の紹介は今後の子育て運動の大切な視点だと思いました。

▼寺崎論文は結果的に女性や祖父母たちに子育ての重荷を背負わせることになっていた「三世代同居家族」「婦人よ家庭にかえれ」等の政府の施策の遂行や、男性が厳しい労働生活もあって「女は家を守るもの」という古い家族観からなかなか抜けられないでいる現実の中で、高校の家庭科教科書で「家族」を自立した人間の相互支援という視点で男女共修で学んでいることを教えてください。学んだ子ども達の家族論も聞きたいと思いました。

▼県下五万の組合員の活動にふれた田家論文の中に家族が孤立状態から立上がり、地域に新しい家族像の共同・連帯の輪をひろげている息吹を感じました。みなさんとこれからの地域のアたらしい共同とはなにかを実践的に誌上討論をしたいと思います。

▼児玉さんの手記、感動しました。いのちの重さや温かさをしっとりと感じられない乾いた日常生活を否応なしにさせられている現実があります。

▼ウチナーンチュエ土地さんの沖縄への熱い思いを受け止め、沖縄サミットでこの基地沖縄の苦悩が世界につたわる連帯の行動をどうあらわすか考えました。新潟の空も米空軍の訓練空域。知らない人が多いと思います。

▼関氏から「ロシアの子どもたち」の近況を報じる論文をお寄せいただきました。価値観の激動、財政的危機の中でも息づく新生ロシアの教育の営みをしました。

(本田)

## にいがたの教育情報 NO. 62

2000年7月20日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明

〒951-8116 新潟市東中通1-86 山崎ビル

電話・FAX (025) 228-2924

振替口座・00640-0-12332

印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。